FUJITSU ファミリ会 論文

ご参加いただいた方々

みずほ情報総研株式会社
鈴木 匠 氏

株式会社マルハン
高原 安未 氏

明治安田システム・テクノロジー株式会社
早川 晶子 氏

2017年度 受賞者座談会

2017年度は一般論文12編、新人賞論文16編の応募があり、秀作論文3編、新人賞5編が入賞論文として選定されました。今回、見事に初めての投稿で秀作論文を受賞された御三方に、FUJITSUファミリ会論文への応募のきっかけや取り組み、その経験から得られたメリットなどについて、お話をうかがいました。

富士通フォーラム2018で行われた秀作論文2編の発表の模様は動画で視聴できます。

『ソフトウェア開発における不良原因分析手法へのテキストマイニング技術の導入』

『ダイバーシティ推進で創る企業の未来 ―女性活用から始まるイノベーション―』

日々の業務の中に論文のテーマを見つける

――まず、皆さんの論文のテーマとファミリ会論文応募の経緯についてお教えいただけますか?

鈴木匠氏(以下 鈴木)　私は、『ソフトウェア開発における不良原因分析手法へのテキストマイニング技術の導入』という標題で論文を書きました。私自身、業務の中でソフトウェア開発における生産性や品質の向上に向けた取り組みを行っており、今回、テキストマイニングをソフトウェア開発の不良原因分析フローに導入することでイノベーションが起こせると考えました。導入した結果、効果を実証できたことから、論文にして社外にも出していこうと考えたのが、論文応募の経緯です。

高原安未氏(以下 高原)　当社では、情報システム部門がFUJITSUファミリ会に積極的に参加している背景があり、以前より社内でファミリ会論文にチャレンジしています。私は2014年からダイバーシティ推進の業務にあたっており、今回、論文を書ける材料は十分あると、担当役員からすすめられたのがきっかけです。これまでの業務をベースにして『ダイバーシティ推進で創る企業の未来 ―女性活用から始まるイノベーション―』としてまとめました。

早川晶子氏(以下 早川)　私は2016年にファミリ会主催の『論文の書き方』セミナーを受講し、とても刺激を受けたのがきっかけです。やはり自身が関わる業務から、『働き方改革を定着させる。改革始動期に企業は何をすべきか』というテーマで、論文にまとめました。

より多くの人に伝わる論文を書くことを心がける

――論文作成にあたって、苦労されたことは何でしょう?

鈴木　業務時間内に、論文執筆の時間をどう確保するか、という部分で苦労しました。私の場合、一日のやるべき仕事を詳細に見積もり、調整しながら時間を捻出しました。社外にデータを持ち出せないため、執筆はすべて社内で行いましたが、限られた時間ということもあり、かなり集中して取り組むことができました。

高原　私は大学の卒論以来でしたので、まず論文とはどのように書くか、という部分で苦労しました。エントリー特典として提供される『レポート・論文の

左上：論文執筆の苦労を共感し合い、和やかな雰囲気の座談会
右上：2017年度受賞者。会場からは盛大な拍手が送られた
下：ファミリ会内田会長より表彰状の授与（春季大会／ 5月18日）

書き方入門（河野哲也、慶応義塾大学出版会）』がとても参考になり、注釈の入れ方など、技術面で活用させていただきました。

早川　実際に行った業務を論文としてまとめることを目指していましたが、みんなに読んでもらう価値のあるテーマが見いだせず苦労しました。そんなとき、働き方改革推進チームの一員になり、ようやく執筆を進めることができました。材料が多く何に焦点を当てるかという難しさもありましたが、上司からのアドバイスを励みに、言い回しなど何度も書き直して伝えられる文章になるよう気を遣いました。

鈴木　私もこれまでにない新しい技術を論文にまとめるという点で、ソフトウェア開発部門以外の、社外の人や、初めて読む人にもわかりやすく伝えるという部分には、とても注意をはらいました。

業務の課題や取り組みを社外とも共有できる貴重な機会

――今回、皆さんは秀作論文に選ばれましたが、反響はいかがでしたか?

高原　社内のイントラネットでも紹介されたのですが、他部署の方々からも反応があって、私たちのダイバーシティの取り組みが社内に周知できるいい機会になりました。多くの方に関わってもらいたいテーマなので、社外の人に認められたということをしっかりと伝えられたのは良かったと感じています。

早川　私も社内で働き方改革を推進していく立場ですので、論文での評価が、改革を定着させていくことにつながっていけばと期待しています。

鈴木　直属の上司から「秀作論文に選ばれたのは、社外からも内容を認めてもらえたということ。業務で忙しい中、よく頑張った」と言ってもらえました。

――これからファミリ会論文に挑戦したいと思われている方々に、伝えたいことはありますか?

鈴木　論文は、問題提起から解決策の提案、実証、結論と順序立てて物事を考えることができます。これは業務を行う上で重要な思考ではないでしょうか。また業務内ではなかなか“書く”ことに集中できる機会は少ないため、こうした体験は報告資料の作成などのスキルを高められる良い機会になると思います。

高原　論文というと構えてしまいますが、私たちの日々の仕事には課題があって、それを改善しようと業務に励んでいます。それをシンプルに書き、わかりやすく伝えるのでも良いのではないでしょうか。

早川　そうですね。普段何気なく行っている業務でも、論文にする過程で関連情報を調べながら整理していけば、その業務についての理解が更に深まります。業務の見える化、という点で大きな成果が得られますし、想いを書き記すことで、日々のモチベーション向上にもつながると思います。

高原　興味はあるけど、書けるか不安、という方も思い切ってエントリーしてください。エントリーしたら、もうやりきるしかないと思い、自分で思う以上の力が湧いて、粘り強く頑張ることができました。この達成感はとても貴重な体験でした。

鈴木　集中して、よくぞ力を出し切った。秀作論文という評価もいただき、有言実行の自分を褒めたくなりました。

高原　早川　同感です!

――本日はありがとうございました。

2018 年度
論文募集中

論文募集の詳細は
本号 P17 をご確認ください。